

# 樋口一葉集

山本洋編

小説にぞりえ

やがて雁首を  
奇麗に拭いて  
一服すつてボ  
ンとはたき、  
又すいつけてお高に渡しながら氣  
をつけてお呉れ店先で言はれると  
人聞きか悪いではないか、菊の井  
のお方は土方の手傳ひを情夫に持  
つなど、考違へをされてもならな  
い、夫は昔しの夢がたりさ、何の今



百十九

近代文学初出複製 1 V

樋口一葉集

山本洋編

和泉書院

注釈者略歴

山本 洋 昭和七年、滋賀県生まれ。京都大

学文学部（国文）卒業。松蔭女子学院大学

教授。専攻分野Ⅱ樋口一葉、萩原朔太郎。

青木稔弥 昭和二九年、大阪市生まれ。京都

大学大学院（博）修了。金蘭短期大学専任

講師。専攻分野Ⅱ坪内逍遙。

谷川恵一 昭和二九年、岐阜県生まれ。京都

大学大学院（博）修了。高知大学人文学部

専任講師。専攻分野Ⅱ明治政治小説。

棚田輝嘉 昭和三〇年生まれ。長野県出身。

京都大学大学院（博）中退。岐阜女子大学

文学部専任講師。専攻分野Ⅱ正宗白鳥、

近代文芸批評史。

近代文学初出複製 ↑

樋口一葉集

昭和五九年五月一日 初版第一刷発行

（検印省略）

定価 一五〇〇円

編者 山本 洋

発行者 廣橋 研三

印刷所 明新 社

製本所 佐伯製本所

発行所 有限会社 和泉書院

大阪市天王寺区上本町三一五一九

〒五四三

電話 〇六一七六八―七七四八

振替 大阪 七一一五〇四三

## は し が き

一 このテキストは、樋口一葉の小説五編を初出誌本文から影印によって復刻し、頭注をつけ、短期大学あるいは大学の講読・演習用の教科書として編さんしたものである。

一 このテキストはしたがって、それぞれの初出誌の版組み、活字の形、挿絵、カット、ノンブル、さらには誤植までも復元していることになる。そのためこのテキストを使うことは、当時の印刷文化の持ち味の一端にふれることにもなる。

一 このテキスト自体のノンブルは、初出誌のノンブルとはまた別に、洋数字でつけられている。

一 頭注についてはスペースの制限があるため、とりあげる語句をしぼり、注内容を簡潔にするすにとどめた。重要と思われるものについては、その注釈の根拠となる資料文献を略名であげた（参照資料文献名・略名は別掲）。

一 初出誌本文に見られる誤植などは、すべてを頭注で扱うことが不可能なので、主要なものだけに限らざるをえなかった。

一 注釈作業には、年若い研究者である青木稔弥、谷川恵一、棚田輝嘉三君の有益な助けを仰いだ。それゆえ注内容については、担当者それぞれの個性にゆだねたところがある。

編者しるす

# 目次

はしがき

大つごもり (『文学界』)	注釈	山谷川	1
たけくらべ (『文学界』)	注釈	青木稔	13
にぎりえ (『文芸倶楽部』)	注釈	山本洋	49
十三夜 (『文芸倶楽部』)	注釈	青木稔	77
わかれ道 (『国民之友』)	注釈	山本洋	97
所収作品初出一覧			107
参照資料文献一覧・略名一覧			108
頭注語句索引			110

大  
つ  
ご  
も  
り

一 約二米。井戸の深さも同じとすれば飲料には不適な中水の出る井戸。山の手なら飲料には約四米の深さが必要。

二 太陽一時「for a short time」(語林)。

三 「大阪詞まきの小わりをいふ」(俚言)。

四 大げさに。江戸ことば。

五 奉公人周旋稼業。手数料は二五錢ぐらい(「国民」明二七・七・二八)。

六 好悪・気分の変わりやすい人。氣まぐれ屋。

七 「半襟」は繻子の、「半がけ」は着物の、それぞれ襟にかける別布の掛け襟。奥様からのもらい物にはそのほか単衣の着古し・前だれ・下駄・髪の商品などがあつた(花覆「ぬくめ鳥」)。

八 給料のほかかにひそかにもらう金銭や物品。

九 奉公人の目見えは三日間(「耕学」うらみ葛)。

一〇 月謝は通例五〇錢、月一度のおさらいには祝儀五〇錢(「娘風俗」)。

一一 値段は二八〇錢ぐらい(「国民」明二六・二・二二)。

一二 細く裂いた竹の皮を、麻

## 大つごもり

(上)

一 菜

井戸は車にて綱のながさ十二尋、勝手は北むきに於て師走の空のから風ひゆうひゆうと吹ぬきの寒さ、ちゝ堪えがたど霜の前に火なぶりの一分は一時にのびて、割木ほどの事も大臺にして叱りとばさるゝ婢女の身つらや、はじめ受宿の老嫗さまが言葉にはお子様方は男女六人、なれども常住家内にお出あそばすは御總領と末お二人、少し御新造は機嫌かひなれど、目色顔色を呑みこんで仕舞へば大したこともなく、結句おだてに乗る買なれば、お前の出様一つで半襟半がけ前垂れの紐にも事は欠くまじ、御身代は町内第一にて、其代り吝き事も二とは下がらねど、よき事には大旦那が甘い方ゆゑ、少しのほまちは無きことも有るまじ、嫌やになつたら私しの處まで端書一枚、詳細ことはいらず、他處の口をさがせどならば足はをしまじ、何れ奉公の秘傳は裏表と言ふて聞かされて、扱もあそろしき事を言ふ人と思へど、何も我が心一つで又此人

のお世話にはなるまじ、勤め大事に骨さへ折らばお氣に入らぬ事も無き筈と定めて、かゝる鬼の主をも持つぞかし、目見への濟みて三日の後、七歳になる嬢様踊りのさらひに午後よりどある、その支度は朝湯にみがきあげて霜氷る曉、あたゝかき寐床の中より御新造灰吹きをたゝきて、これこれと、此詞が眼ざましの時計より胸にひゝきて、三言とは呼ばれもせず特より先きに裸がけの甲斐くしく、井戸端にいつれば月影ながしに残りて、膚をさすやうな風の寒さに夢をわすれぬ、風呂は居風呂にて大きからねど、二つの手桶に溢るゝほど汲みて、十三は入れねばならず、大汗に成りて運びけるうち、輪實のすがりし曲み箇の水ばき下駄、前鼻緒のゆるゆるに成りて、指をうかさねば他愛のなきやう成りし、その下駄にて重きものを持ちたれば足元おぼつかなくて流しもどの水にすべり、おれと言ふ間もなく横にころべば井戸がはにて向ふ脇したゝかに打ちて、可愛や雪はつかしき膚に紫のあと生々しくなりぬ、手桶をも其處に投げ出して一つは満足なりしが一つは底抜けになりけり、此桶の價なにはど知らねど、身代これが爲につぶれるかの様に、御新造の顔きはに青筋あ

緒やシユロの芯にまいて作った下駄の鼻緒。水に強い。

一三 水にぬれても差しつかえない勝手川の下駄。

一四 弱くて手こたえない。

一 潔白なものを疑ぐつてかかるやり口。西鶴「本朝不孝卷四」木陰の袖口」から。

二 月一円から一円五、銭ほど。

三 道逢「妹と背かぐみ」にも一寸使に出たついでに「息休め」をするという叙述がある。

四 暇をぬすんで走り通してても伯父の家へ行ったら。

五 ことわざ。悪事はすぐ世にわかる意。

六 貧乏所帯。

七 美しい着物をきて。

八 当時は初日から各幕の出せろうことはなかった(諸注)。なお見物には一人一円五、銭以上必要(娘風俗)。

九 「麻をかに扱ふ」こと(如電「浄曲評釈」)。

一〇 うぐいすの初音(その年初めてのさえずり)が思われてなんとなく慕わしいの意。

一一 世間を悲しくつらく生き暮らす。「うぐひす」は、鳥の

そろしく、朝飯の御給仕より睨まれて其日一日ものも仰せられず、一日経てよりは着のあげあろした、此家の品は無賃では出来ぬ、主の物どて粗末に思ふたら爵が當るぞへと明くれの談義、来る人毎につげられて若き心には恥かしく、其後は物ごとを念をいれて、遂ひに塵想を爲ぬやうに成りぬ、世間に下女つかふ人も多けれど、山村はど下女の替る家はあるまじ、月に二人は平常のこと、三日四日に歸りしもあれば、一夜居て逃げ出しもあらん、開闢以來を尋ねたらば、折る指にあの内儀が袖口おもはる、思へばお巖は辛棒もの、彼女にむごく當らば天爵たちどころに、此後は東京ひろしと雖山村の下女に成る者は有るまじ、感心なもの、美事の心がけと褒めるもあれば、第一容貌が申分なしたと、男は直にこれを言ひけり

さ、馳せ抜けても、とはおもへど悪事千里といへば折角の辛棒を水泡にして、お暇ともならばいよいよ病人の伯父に心配をかけ、瘦世帯に一日の厄介も氣の毒なり、そのうちにはと手紙斗りをやりて、身は此處に心ならずも日を送りける。師走の月は世間一帯もの忙はしき中を、殊更に撰りて綺羅をかざり、一昨日出そろひしと聞く某れの芝居、狂言も折から面白き新物の、これを見のがしてはど娘共の騒ぐに、見物は十五日、めづらしく家内中との觸れに成りけり、此お供を嬉しがるは平常の事、父母なき後は只一人の大切な人が、病ひの床に見舞ふ事も爲で、物見遊山にあるくべき身ならず、御機嫌に逆ひたらば夫れまでとして遊びの代りのお暇を願ひしに流石は日頃のつどめ振りもあり、一日過ぎての次の日、早歩きで早く歸れど、さりとては氣儘の仰せに有難う存じますと言ひしは覺えて、やがては車の上に小石川はまだかまだかど鈍かしがりぬ。

初音町といへば床しけれど、世をうぐひすの貧乏町ぞかし、正直安兵衛とて神は此頭(二)に宿り給ふべき大藥罐(三)の類きはびかびかとして、これを目印に田町より菊坂あたりへかけて、霜



うぐいすと、憂く食うとの掛け詞「食う」は口過ぎをするの意。  
一 銅・真鍮製の大きな湯桶かし。その底の形の類似から俗につるつるのはげ頭をいう。

一 商品の仕入れにあてる資本金が少ないので、売上げ金をすぐになん仕入れに使う、そのくり返し。

二 へぎで作った舟型の容器に形よく盛り合わせたきゅうりを三物を包みいれるため、わら

を束ねて作った一種の容器。  
四 型どおりにきまりきった。「几帳面」を「記帳面」としや

れたものか。  
五 一か月の授業が五厘でいどの私立小学校。当時の東京の公立尋常小学校の授業料は、月額最高五〇銭最低二銭(年報)。

六 神田多町の青物市。  
七 神経痛(諸注)、筋骨痛(国大)とあるが、関節リウマチ

か。  
八 家賃二円二〇銭、四畳半に三尺の台所で、人力車夫の中等

ていどの世帯(暗黒)。  
九 太陽一丈。

九 太陽一丈。

子大根の御用をもつとめける、薄もどでを折かへすなれば、

折柄直の安うて達の有る物よりはかは、棹なき舟に乗合の胡瓜、苞に松茸の初物などは持たで、八百安が物は何時も帳面に

につけたやうなど笑はるれど、最負は有がたき物、曲りなりにも親子三人の口をぬらして、三之助とて八歳になるを五

厘學校に通學するほどの義務もしけれど、世の秋つらし九月の末、俄かに風が身にしむといふ朝、神田に買出しの荷を我

家までかつき入れると其まゝ、發熱に續いて骨病みのいでしやら、三月ごしの今日まで商ひはさらなること、段々に食ひ

へらして天秤まで賣る仕業になれば、表店の活計たち難く、月五十錢のうら屋に人目の恥を厭ふべき身ならず、又時節

があらばとて引越しも無慘や車に乗するは病人ばかり、片手にたらぬ荷をからけて、同じ町の隅へと潜みぬ。お峯は車より下りて开處此處と尋ぬるうち、紙鳶紙風船などを軒につる

して、子供を集めた駄菓子屋の門に、もし三之助の交りてかど覗けど、影も見えぬに露臍して思はず往來を見れば、我が

居るよりは向ひのがわを瘦せぎすの子供が薬瓶もちてゆく後姿、三之助よりは尤も高く餘り瘦せたる子とおもへど、様子

の似たるにつかへど驅け寄りて顔そのぞけば、やあ姉さん、あれ三ちゃんで有つたか、さても好い處でと伴はれて行くに、酒屋と手屋の奥深く、酒板がたへど薄ぐらき裏に入れば、三之助は先へ驅けて、父さん母さん、姉さんを連れて歸つたと門口より呼たてぬ。

何お峯が来たかど安兵衛が起あがれば、女房は内職の仕立物に餘念なかりし手を止めて、まわへこれは珍らしいと手を取らぬ斗に喜ばれ、見れば六疊一間に一間の戸棚只一つ、箆筒長持は元來あるべき家ならぬと、見し長火鉢のかげもなく、今戸焼の四角なるを、同じ形の箱に入れて、此品がそもへこの家の道具らしき物、聞けば米櫃もなきよしさりと悲しき成行、師走の空に芝居みる人もあるをとお峰はまづ涙ぐまれて、まづへ風の寒きに寐てお出なされませ、と堅焼に似し薄ぶどんを伯父の肩に着せて、さぞさぞ澤山のお苦勞なされましたら、伯母様も何處やら瘦せが見えます、心配のあまり煩ふて下さりますな、それでも日増しに輕快で御坐んすか、手紙で様子は聞けど見ねば氣にかゝりて、今日のお暇を待ちに待つて漸の事、何住居などは宜ござります、伯父様御全快

- 一〇 太陽「溝板」。
- 一一 女の内職としては一日七錢五厘ももらえば最上であつた(岩五郎「資本」)。
- 一二 「土間、炊場をも合せて六畳の間」(柳浪「黒蜩」)。
- 一三 堅く焼いた塩せんべい。この頃は塩せんべいが流行(新「燈籠」)。
- 一 他にまきれて見落とす。
- 二 婦人の腰の痛む病氣(大日因)。読みは「すばく」。
- 三 前掛け「東京にては前掛を用ゐるは衣服の汚点を防がんとするにあらず之を以て一種の外見と致居候」。「一枚三〇錢より八九〇錢、平均五〇錢(娘風俗)」。
- 四 仏滅日。すべてに凶という悪日。年間に六〇日ある。
- 五 男の厄年は数え二五歳と四二歳。その前年を前厄という。
- 六 塩つけの魚などを商う店。
- 七 太陽「野郎」。
- 八 露伴「日ぐらし物語」にも、学校の課業の終了は三時ごろとある。

にならば表店に出るも譯なき事なれば、一日もはやく快く成つて下され、伯父様に何ぞと存じたれど、道は遠し心は急ぐ、車夫のあしが何時より遅いやうに思はれて、御好物の飴屋が軒も見はぐりました、此金は少しなれど私しが小遣の残り、麴町の御親類よりお客様の有し時、その御隠居様寸白の起りなされてお苦しみの有しに、夜を徹してお腰をもみたれば、前垂れでも買へどて下された、夫れや是れや、お家は堅けれど他處よりのお方が最負になされて、伯父様よろこんで下され、勤めにくくも御座んせぬ、此巾着も半襟もみな頂き物、襟は質素なれば伯母様かけて下され、巾着は少し形をかへて三の助がお辨當の袋に丁度好いやら、夫れでも學校へは行きますか、お清書があらば姉にも見せてと夫から夫へ言ふ事ながし。

七つの歳に父親得意場の蔵普請に、足場を昇りて中ぬりの泥纏をもちながら、下なる奴に物いひつけんと振向く途端、唇に黒星の佛滅でも言ふ日で有りしか、年來なれたる足場をあやまりて、落たるも落たるも下は敷石に摸様がはりの所ありて、堀ちこしてつみ立たる切角に頭腦した、か打つたれば甲斐なし、哀れ四十二の前厄と人々後にあそろしがりぬ、母

は安兵衛が同胞なれば此處に引取られて、これも二年の後はやり風俄かに重く成りて死たれば、後は安兵衛夫婦を親として、十八の今日まで思はいふに及ばず、姉さんと呼ばるれば三の助は弟のやうに可愛く、此處へ此處へと呼んで背をなぞ額を覗いて、さぞ父さんが病氣で淋しく愁らかろ、お正月も直に來れば姉が何ぞ買てあげますぞへ、母さんに無理を言ふて困らしては成りませぬと教ゆれば、困らせる處か、お峯きいてくれ、年は八歳なれど膝も大きき力もある、我が寮てからは稼手なしの費用は重なる、四苦八苦を見かねたやら、表の鹽物やが野良と一處に、覗を買ひ出しては足の及ぶだけ擔ぎ廻り、野良が八錢うれば十錢の商ひは必らずある、一つは天道さまが奴の孝行を見通してか、兎なり角なり、藥代は三が働き、お峯はめてやつてくれとて、父は蒲團をかぶりに涙に聲をしぼりぬ。學校は好きにも好きにも遂ひに世話を焼かしたる事なく、朝めし喰べると驅け出して三時の退校に道草のいたづら爲たことなく、自慢ではなけれど先生様にも賞め物の子を、貧乏なればこそ覗をかつがせて、此寒空に小さな足に草鞋をはかせる親心、察して下されど伯母も涙な

- 一 わらじすれ。
- 二 すそが太ももあたりまでの労働するにたいして、足もとまである普通の首物をいう。
- 三 肩当ての部分の縫い目がほころびての意か。
- 四 帰ったからといつても。
- 五 一初奉公の日は輪少きもの皆泣く。略)生家の事のみ恋しうて、逃げても還らまほし(紅葉(不言)。
- 六 気が持ちもしっかりしてきて「張弓」は「張る」のしやれた表現、次の「引」をみちびく。
- 七 三か月期限。
- 八 天引きの利息。
- 九 人に頼まれた貸仕事。「針手の利く人仕事にて貧乏に継をあげがひ(室村(商人)。
- 一〇 単衣物一枚の縫賃。錢二厘(岩五郎(工銀)。
- 一一 富貴な町人の具体的な一例、公債株券。〇万円、地面家作一〇か所、現金五万円、所有財産一四、五方、このうちより年に、三万円の上りかがある(岩五郎(生活術)。
- 一二 借用証書の返済期限目を書きかえて延長すること。
- 一三 書きかえの時払わねばな

り。お峯は三之助を抱きしめて、扱も扱も世間に無類の孝行、大柄とても八歳は八歳、天祥かたにして痛みはせぬか、足に草鞋くひは出来ぬかや、堪忍して下され今日よりは私しも家に歸りて、伯父様の介抱、活計の助けもします、知らぬ事どて今朝までも釣瓶の繩の水を愁らがつたは勿躰ない、學校ざかりの年に親を擔がせて姉が長い着物きて居りようか、伯父様暇をとつて下され、私はもはや奉公はよしますとて取亂して泣きぬ。三之助はをどなく、ほろりほろりと涙のこぼれるを、見せじどうつむきたる肩のあたり、針目あらはに衣、破れて、此肩にかつぐか見る目も愁らし、安兵衛はお峯が暇を取らんといふに夫れは以ての外、志しは嬉しけれど歸りてからが女の働き、夫れのみか御主人へは給金の前借りもあり、それと言つて歸られる物ではなし、初奉公が肝腎、辛棒がならで戻つたと思はれてもならぬば、お主大事に勤めてくれ、我が病氣も長くはあるまじ、少しよくは氣の張弓、引ついで商ひもなる道理、あゝ今半月の今歳が過ぎれば初春はよき事も来るべし、何事も辛棒辛棒、三之助も辛棒してくれ、お峯も辛棒してくれとて涙を納めぬ。珍らしき客に馳走

は出来ぬと好物の今川燒、里李の羹ころがしなど、澤山たべろよと言ふ言葉が嬉し、苦勞はかけまじと思へど見す見す大晦日に迫りたる家の難儀、胸につかへの病ひは瘴にあらねど、そもそも床につきたる時、田町の高利貸より三月しばかりで十圓かりし、一圓五十錢は天利とて手に入りしは八圓半、九月の末よりなれば此月はどうでも約束の期限なれど、此中にて何ぞ成るべきぞ、額を合せて談合の妻は人仕事に指先より血をいだして日に十錢の積きもならず、三之助に聞かすとも甲斐なし、お峯が主は白金の臺町に貸長屋の百軒も持ちて、あがり物ばかりに常綺羅美々しく、我れ一度お峯への用事ありて門まで行きしが、千兩にては出来まじき土藏の普請、うら山しき富貴と見たりし、其主人に一年の馴染、氣に入りの奉公人が少々の無心を聞かぬとは申されまじ、此月末に書き換へを泣きつきて、をどりの一兩二分を此處に拂へば又三月の延期にはなる、斯くいはいは欲に似たれど、大道餅買うてなり三ヶ月の雜糞に箸を持たせずは出世前の三之助に親のある甲斐もなし、晦日まで金二兩、言ひにくく共この才覺たのみ度きよしを言ひ出しけるに、お峯しばらく思案して、よろ

らない二重の利息。

一四 一葉も二十五年暮れに、期限のきた借金の利子を二円支払つてゐる。

一五 つくめん。算段。

一 金銭問題はなかなか決着がつかないものだが。

二 事をしそこなつては。

三 一月十六日の載入りをさす。

四 「継母腹の次女の名」(小学館全集)。

五 笑うべきことだ。

六 身持ちのよくないふるまい。

七 無法なこと一点ばり。

八 宿場町品川にあつた遊廓。

九 「定レル住居モ無クテ漂泊ヒ居ル悲漢ノ稱」(言海)。

一〇 戸主の継承権を他にゆすり、若くして閑居の身分になること。

一一 隠居した者に与える手当。

一二 止めたてせず。

一三 本来は、神の意思のおつけをいう。

一四 分家の主人。放蕩無頼を理由に廃嫡され分家する実例は多かつた(国民「明治七八」)。

一五 「身代烟となりて消え」

しう御座んす儘かに受合ました、むづかしくはお給金の前借りにしてなり願ひまじよ、見る目と家内とは違ひて何處にも金銭の癖は明きにくけれど、多くではなし夫れだけで此處の始末がつくなれば、理由を聞いて厭やは仰せらるまじ、夫れにつけても首尾そこなうてはならねば、今日は私は歸ります、又の宿下りは春長、その頃には昔々うち寄つて笑ひたきもの、とて此金を受合ける。金は何として越す、三の助を貰ひにやろかどあれば、ほんに夫で御座んす、常日さへあるに大三十日といふては私の身に隙はあるまじ、道の遠きに可愛さうなれど三ちやんを頼みます、ひる前のうちに必らず必らず支度はして置ますとて、首尾よく受合てお峰はかへりぬ。

(下)

石之助とて山村の總領息子、母の違ふに父親の愛も薄く、これを養子に出して家督は妹娘の中にとの相談、十年の昔しより耳に狹みておもしろからず、今の世に勘當のならぬこそをかしけれ、思ひのまゝに遊びて母が泣きをど父親の事は忘れて、十五の春より不了簡をはじめぬ、男振にがみありて利發

らしき眼ざし、色は黒けれど好き嫌子とて四隣の娘どもが風説も聞えけれど、唯亂暴一途に品川へも足は向くれど騒ぎは其座限り、夜中に車を飛ばして車町の破落戸がもとをたゝき起し、それ酒かへ肴ど、かみ入れの底をはたきて無理を徹すが道樂なりけり、到底これに相續は石油藏に火を入れるやうなもの、身代烟となりて消え残る我等なにとせん、あどの兄弟も不憫と母親父に讒言の絶えまなく、さりとて此放蕩子を養子にと申受る人此世には有るまじ、どかくは有金の何ほどを分けて、若隠居の別戸籍にと内々の相談は極りたれど、本人うわの空に聞き流して手に乗らず、分配金は一万、隠居ぶち月に越して、遊興に關を据へず、父上なくならば親代りの我兄上と捧げて竈の神の松一本も我が託宣を聞く心ならば、いかにもいかに別戸の御主人に成りて、此家の爲には働かぬが勝手、それ宜しくは併せの通りになりまじよと、とうても嫌やがらせを言ひて困らせける。去歲にくらべて長屋もふゑたり、所得は倍にと世間の口より我家の様子を知りて、をかしやをかしや、其やうにのびして誰が物にする氣ぞ、火事は燈明皿よりも出るものぞかし、總領と名のる火の玉がころ

失せかねない危険な火元という。

- 一 綿をうすく入れた小形の夜着。
- 二 はらわたをむしり取った片口いwashを水洗いし陰干しにしたもの。正月料理に使う。
- 三 金銭の支出をひき締めること。儉約。始末。
- 四 あやふや。
- 五 心。
- 六 多智有識の高徳の僧。
- 七 瞋志(激しい怒り・うらみ)の炎にからたが真っ黒になるほど焼けこけてという修辭。用例「瞋志のほむらは身をこがす」(紅葉(夏瘦))。
- 八 言うにこと欠いて。よりによってこんな時に。
- 九 金の話を持ち出すといっそう煽動がつるもののだの意。敵菓(は菓ノ互ニ書トナルモノ) (三日月海)。「養生糖に唐辛子は煤掃に餓を喰ふ様な物で大敵菓だ」(三人占)。
- 一〇 実際に。現実。
- 一一 大事にする意から、ここでは、それにかまける、かかすらう意。
- 一二 切とりあおうとしない

がるとは知らぬか、やがて審きあげて貴様たちに好き正月をさせるぞと、伊皿子あたりの貧乏人を喜ばして、大晦日を當てに大呑みの場處もさだめぬ。

それ兄様のお歸りといへば、妹ども怕がりて腫れ物のやうに障るものなく、何事も言ふなりの通るに一段と我まゝをつのらして炬燵に兩足、酔ざめの水を水をどと狼藉はこれに止めをさしぬ、にくしと思へど流石に義理はつらき物かや、母親かげの毒舌をかくして風引かぬやうに小抱卷なにくれと枕まで宛がひて、明日の支度のむしり罨、人手にかけては粗末に成るものと聞こえよがしの經濟を枕もとに見しらせぬ。正午も近づけばお峰は伯父への約束こゝろもどなく、御新造が御機嫌を見手ふに暇も無ければ、僅の手すきに頭りの手拭ひを丸めて。此ほどより願ひましたる事、折からお忙がしき時こゝろ無きやうなれど、今日の晝過ぎにと先方へ約束のきびしき金とやら、お助けの願はれますれば伯父の仕合せ私の喜び、いついまでも御恩に着まするとて手をすりて頼みける、最新いひ出し時にやふやながら結局はよしと有し言葉を断みに、又の機嫌むづかしければ五月蠅いひては却りて如何と今日ま

でも我慢しけれど、約束は今日といふ大晦日のひる前、忘れてか何とも仰せの無き心もどなさ、我れには身に迫りし大事と言ひにくきを我慢して斯くと申ける。御新造は驚きたるやうな惘れ顔して、それはまあ何の事やら、成ほどお前が伯父さんの病氣、つゝいて借金の話し聞きましたたが、今が今私の宅から立換へようとは言はなかつた筈、それはお前が何ぞの間違へ、私は毛頭も覺えの無き事と、これが此人の十八番とはさもさても情なし。

花紅葉うるはしく仕立し娘たちが春着の小袖、襟をそろへて襟をかさねて、眺めつ眺めさせて喜ばんものを、邪魔ものゝ兄が見る目うるさし、早く出てゆけ疾く去ぬと思ふおもひは口こそ出さぬ、もち前の疳癩したに堪えがたく、智識の坊様が眼に御覽じたらば、痰につゝまれて身は黒けふりに心は狂亂の折ふし、言ふ事もいふ事、金は敵藥ぞかし、現在うけ合ひしは我れに覺えあれど何の夫れを厭ふ事かは、大方お前が聞ちがへど立きりて、煙草輪にふき私は知らぬと濟ましけり。

エ、大金でもあるとか、金なら二圓、しかも口づから承知し

で、「支度金の千円で立切て(略)いふ事なんぞは少しも耳へ入れない(紅葉「夏小袖」)。

一 硯・筆墨を入れた懸子の部分と、印判・金銭などを収める引出しの部分とに分かれた頑丈な携帯用の貴重品箱。懸子は外箱の内縁にはめこむよう作られた箱をいう。

二 一円札が一〇枚か二〇枚か。三 明治四年十月二十二日(陰曆九月九日)より江戸城日本丸で、大砲を撃って正午を報じた。

四 芝区西応寺町。葉母子は、父の死後一時、同町六〇番地に兄と同居したことがある。

五 海上で釣をすること。芝浜または深川辺の船宿から、船頭をやとって船を出す。其六人で仲間を組み、一〇銭前後(国民明七・六・七)。

六 釣好きで頼みがない人。七 針仕事を受け持つやとい人。八 ぬすんだ金を使つても。九 わずか一円札二枚。

て置きながら十日とたぬに、さうくはなさるまじ、あれあの懸け硯の引出しにも、これは手つかずの分とて一と東、十か二十か悉皆とは言はず唯二枚にて伯父が喜び伯母が笑顔、三の助に難儀の著も取らさるゝと言はれしを思ふにも、どうでも欲しきは彼の金ぞ、恨めしきは御新造とお峯はくやしさに物も言はれず、常々をどなしき身は理屈づめにやり込める術もなく、すこゝと勝手に立てば正午の號砲の音たかく、かゝる折ふし殊更むねには響くものなり。

お母様に直様御出下さるやう、今朝よりの御苦るしみに潮時は午後、初産なれば旦那どりとめなく御騒ぎなされて、お老人なき家なれば混雑お話しにならず、今が今お出をどて、生死の分目といふ初産に、西應寺の娘がもとよりの迎ひの車、これは大晦日どて遠慮のならぬものなり、家内には金もあり、放蕩どのが寝ては居る、心は二つ、割られぬ身なれば恋愛の重きに引かれて、車には乗りけれど、かゝる時氣樂の良人が心根つらく、今日あたり沖釣りでも無き物をと、太公望がはり合ひなき人をつくゝゝと恨みて御新造出られぬ。行違へに三之助、こゝと聞たる白金臺町、相違なくおねあて

て、我身のみすばらしきに姉の肩身を思ひやりて、勝手口より怕々のぞけば、誰れぞ来しかど竈の前に泣き伏したるお峰が、涙をかくして見出せば此子、あゝよく来たとも言はれぬ仕義を何とせん、姉様道入つても叱かれはしませぬか、約束のものは貰つて行かれますか、旦那や御新造によくお禮を申てこいと父さんが言ひましたと、仔細を知らねば喜び顔つらや、まづ待つて下され、少し用もあればと馳せ行きて内外を見廻せば、嬢様がたは庭に出て追羽子に餘念なく、小僧のはまだお使ひより歸らず、お針は二階にてしかも蠶なれば仔細なし、若旦那はど見ればお居間の炬燵に今ぞ夢の真最中、拜みまする神さま佛さま、私は悪人に成りまする、なりたうは無けれど成らねば成りませぬ、爵をお當てなさらば私一人、遣うても伯父や伯母は知らぬ事なればお免しなされませ、勿体なけれど此金ぬすませて下されど、かねて見置し硯の引出しより、束のうちは唯二枚、つかみし後は夢とも現ともしらず、三の助に渡して歸したる仔什を、見し人なしと思へるは愚かや。

\* \* \* \* \*

一 七福神の一人である恵比須の神の笑顔からいう。沖釣りの成果があったためにここに顔。

二 夜道を走る車夫への特別の心づけ。蠟燭賃、錢、葎村、商人。

三 府下南葛師郡小松川村近辺で多く産したあぶら菜の一種。葉がやわらかく、ここでは新年の雑煮用。冬期にも栽培した。

四 ここでは、いずれまた。暇な時にの意。し貞注、参照。

五 ことわざ。過去、現在、未來にわたって親は子どもに苦勞する。首械は、罪人の首にはめる木製・鉄製の刑具。

六 どうしても断ち切れない親と子との血のつながり。

七 墮落の果てに行きつくのは八 花けり人のこと。保証人。

九 花札はくちで思いがけず大負けして。太陽「一陣」。

一〇 太陽「仲間」。

一一 まっ正面に押し立てて。「真向」は本来宛の正面。

一二 年賀のあいさつに他家を訪問してまわること。

その日も暮れ近く旦那つりより恵比須がはして歸るれば、御新造も縮いて安産の喜びに返りの車夫にまで愛想よく、今宵を仕舞へば又見舞まする、明日は早くに妹共の誰れなりとも一人 必らず手傳はするといふて下され、さてさて御苦勞と蠟燭代などをやりて、やれ忙がしや誰れぞ暇な身軀を片身かりたきもの、お峰小松菜はゆで、置いたか、數の子は洗つたか、大旦那はお歸りに成つたか、若旦那は、どこれは小聲にまだと聞て頼に敵を宥せぬ。

石之助その夜はをどなく、新年は明日よりの三ヶ日なりとも、我が家にて祝ふべき筈ながら、御存じの締りなし、堅くるしき袴づれに挨拶も面倒、異見も質は聞きあきたり、親類の顔に美しくしきも無ければ見たしと思ふ念もなく、裏屋の友達がもとに今宵約束もござれば、一まづお暇としていづれ春永に頂戴もの、數々は願ひまする、折からお目出度失先、お歳暮には何ほど下さりますかと、朝より賤込て父の歸りを待しは此金なり、子は三界の首械といへど、まこと放蕩を子に持つ親はかり不幸なるはなし、切られぬ縁の血筋といへば、あるほどの悪戯を盡して、瓦解の曉に落こむは此淵、知らぬと言ひても世間のゆるさねは、家の名をしく我が顔はづかしきに、惜しき金庫をも聞くぞかし、それを見込みて石之助、今宵を期限の借金がござる、人の受けに立ちて判を爲たるもあ

れば、花見のむしろに狂風一座、破落戸中間に遣る物を遣らねば此納りむづかし、我れは詮方なけれどお名前前に申わけなくなど、つまりは此金の欲しと聞えぬ。母は大方かゝる事と今朝よりの掛念うたがひなく、幾金どねだるか、ゆるき旦那どの、處置はがゆしと思へど、我れも口にては勝がたき石之助の辨に、おみねを泣かせし今朝とは變りて、父が顔色いかにとばかり、折々見やる尻目おそろし、父は靜かに金庫の間へ立しが、やがて五十圓束一つ持ち來て、これは貴様か遣るではなし、まだ縁つかぬ妹共が不憫、姉が長人の顔にもかゝる、此山村は代々堅氣一方に、正直律義を眞向にして、恐るい風説を立てられた事も無き筈を、天魔の生れがはりか貴様といふ恐者の出來て、なきあまりの無分別に人の懐でも覗うやうにならば、耻は我が一代に止まらず、重しといふとも身代は二の次、兄弟親に耻を見するな、貴様にいふとも申妻はなけれど、通常ならば山村の若旦那とて、入らぬ世間に悪許もうけず、我が代りの年禮に少しの勞をも助ける筈を、六十に近き親に泣きを見するは辭あたりで無きか、子供の時には本の少しものぞいた奴、何故これが分りをやらぬ、さあ行け、歸れ、何處へでも歸れ、此家に耻は見せるなどて父は奥深く還入りて、金は石之助が懐中に入りぬ。

\* \* \* \* \*

- 一 ずうずうしく。
- 二 太陽「放蕩息子」。
- 三 「塩ヲ、花ノ如ク散ラシテ、不浄ヲ液フコト」(「大言」)。
- 四 憎にくしい悪口をいっそう激しく言つた。
- 五 夢中で行なつた行為を今あらためてふり返つて。
- 六 一万枚のなかのたつた一枚、すぐさま発覚する。
- 七 無実の罪名をかぶせて。
- 八 罪の疑いをはらすことのできぬのも貧乏人の常であつて。「下す」は「濡れ衣」の縁語。
- 九 一年間の総決算。
- 一〇 「潔白正直は人間の至宝也。是をだに守らば何時かは好時逢はずやある」(一葉「しのぶぐさ」明二五・八・一一)。
- 一一 伯父様と共謀したので。
- 一二 「時々刻々に近づく」ことのとえ(「誇大」)。
- 一三 罪人としての取り調べ。
- 一四 「生レ年ニヨリテ、其人ヲ守護スト云フ」(「大言」)。
- 一五 石之助とお峰の今後に余情をひかせような結句だが、三月後ふたたび借金の期限が訪れるその現実のきびしさへのサスペンスも意図されているか。

お母様御機げんよう、好ひ新年を迎ひなされませ、左様ならば参りますと、暇乞わざどうやしく、お峰下駄を直せ、お玄關からお歸りではない、お出かけだぞと圖分しく大手を振りて、行先は何處、父が涙は一夜の騒ぎに夢どやならん、持つまじきは放蕩息子、持つまじきは放蕩を仕立るまゝ、母ぞかし。鹽花こそふらねあどは一先掃き出して、若旦那退散のよろこび、金はをしけれど見る目も憎くければ、家に居らぬは上々なり、どうすれば彼のやうに圖太くなられるか、あの子を生んだ母さんの顔が見たいと、御新造例に依つて毒舌をみがきぬ。お峰は此出来事も何として耳に入るべき、犯したる罪の恐ろしさに、我れか、人か、先刻の仕業はど今更夢路を辿りて、おもへば此事あらはれずして済むべきや、万が中なる一枚とても數ふれば目の前なるを、願ひの高に相應の員數、手近かの處になくなりしとあらば、我れにしても疑ひは何處に向くべき、調べられなば何とせん、何といはん、言ひ抜けんは罪深し、白状せば伯父が上にもかゝる、我が罪は覺悟の上なれど、物がたき伯父様にまで濡れ衣を着せて、干されぬは貧乏のならひ、かゝる事もする物ど人の言ひはせぬか、悲しや何としたりよかろ、伯父様に疵のつかぬやう、我身が咽死する法は無きかと、目は御新造が起居にしたがひて、心はかけ硯のもとにさまよひぬ。

大勘定とて此夜あるほどの金をまどめて封印の事あり、御新造それ／＼と思ひ出して、懸け硯に先刻、家根屋の太印に貸付のもどり、あれが二十御座りました、お峰お峰、かけ硯を此處へと奥の間より呼はれて、最早此時わが命は、無き物、大旦那が御目通りにて始めよりの事を申、御新造が無情そのまゝに言ふてのけ、術もなし方もなし正直は我身の守り、逃げもせず隠られもせず、欲かしらねど盗みましたと白状はしましよ、伯父様同心で無き丈をどこまでも陳べて、聞かれずば甲斐なし其場舌かみ切つて死んだなら、命にかへて嘘とは思しめずまじ、それよと度胸すわれど、奥の間へゆく心は屠處の羊なり。

\* \* \* \* \*

お峰が引出したるは唯二枚、残り十八あるべき筈を、いかにしけん束のまゝ見えずとて底をかへしてふる(ども甲斐なし、怪しきは落ちりし紙切れに、いつ認めしか受取一通。

(引出しの分も拜借致し候 石之助)

さては放蕩かど人々顔を見合せてお峰が詮議は無かりき、孝の餘鶴は我れしらず石之助の罪に成りしか、いや／＼知りて序に冠りし罪かも知れず、さらば石之助はお峰が守り本尊なるべし、後の事しりたや。

(終)



